



米沢藩の解剖事跡

米沢支部 近

厚

米沢支部理事
鷹山公と先人を顕彰する会会長
医学博士
山形県医師会顧問
米沢市医師会顧問

埋もれていた史料の発掘によって、史実はしばしば書き替えられる。身近な事例として、米沢藩における解剖事跡があげられる。以下、北條元一博士の研究資料『米沢藩医史私撰』を参考にしながら筆を進めることにする。

米沢の市街地を流れる松川の西岸河畔に北村公園がある。その一隅に、高さ一・三メートルほどの凝灰岩に「解體供養碑」と刻まれた石碑が建っているが、側面の建立年月を示す「明治四年三月」の文字は辛うじて判読できる。

昭和十九年（一九四四）刊行の『米澤市史』に「明治三年（一八七〇）、医学校が研究資料にするため刑死体の解剖を上願して許可された。これが米沢における死体解剖の濫觴（起源）である」という主旨の記述がある。医学校は藩校興讓館内の好生堂を指している。ちなみに明治三年には、大学

東校（東京大学医学部の前身）でもはじめて刑死体の解剖が行われた。このとき大学に運ばれた六つの刑死体のなかに、米沢藩士雲井龍雄の遺体があった。雲井は、明治新政府に対する謀反の罪で伝馬町の獄舎に収監され、明治三年十二月、小塚原刑場で処刑された。

さて米沢藩の正規の刑場は松原にあったが、ほかに松川の東岸河畔に闇打場やみうちばと呼ばれた米沢藩特異の刑場があった。盗みや火付の罪人（武士は除く）を数十間歩かせて後ろから斬り捨てるのである。明治初年の刑死体の解剖はここで行われ、その跡に供養碑が建てられたと伝えられている。その後洪水のため碑は対岸（西岸）に移され、後で建てられた火葬場の裏手に放置されていた。昭和五十四年（一九七九）に至り、市制九十周年を機に碑は現在地に移転されたものである。

しかし、代々米沢藩藩医を勤めた堀内家に伝わる「堀内文書」が公開され、その解読が進むにつれて、さまざまな新事実が判明した。そのひとつは、明治四年をさかのぼること百六年の明和元年（一七六四）に、松原刑場で刑死体の解剖が行われたことである。そのときの貴重な記録「手足骨節之圖」が残されていた。さらに安永八年（一七七九）に内臓に重点をおいた解剖が行われた記述があるが、このときの記録や資料は失われている。明和元年は上杉家九代重定の時代、安永八年は同じく十代治憲（鷹山）の時代であった。二回目の解剖から二十三年後の享和元年（一八〇一）、町奉行の名で「御仕置者捨胴（刑死体）の腑分（解剖）を禁止する」旨の布告が出された。これは、それまでの二十三年間に藩医によって解剖が行われていたことを裏書きするとともに

解體供養碑

この石碑は、医学研究で解體（解剖）された人を慰霊するために、明治4年、関係者によって建てられたものです。この前年に、米沢藩医局では新政府に対し刑死者の遺体解剖を申請し、許されています。

米沢における解剖の歴史は古く鷹山公の時代に死罪人を解剖した記録があり、東北では最も古い記録になります。

ここに市制90周年を迎えるにあたり、米沢の医学発展の歩みを回顧し、この石碑をその象徴として末長く後世に伝えるため、保全整備したものです。

昭和54年11月

米 沢 市

に、明治三年まで米沢藩の解剖が中断された根拠を示すものと考えられる。

現在、「解體供養碑」のかたわらに市民や観光客向けの解説文が掲示されている。次にその全文を紹介する。

一般向きに書かれた解説であるが、「堀内文書」に徴すると、最初の解剖は鷹山の先代重定の時代であったことが明白である。なお「堀内文書」は、日本医学会の昭和四十五、四十六年度文部省科学研究費による総合研究「江戸時代後半の蘭方医学発展に関する研究」の資料として、その解読と内容の検討が行われている。

人体解剖は、医史学的観点に立つと、観念的な五臓六腑説をとる漢方医学から、合理的、実証主義的な西洋医学への転換の第一歩と目されるため、いつの時代に、いかなる状況のもとで行われたかはきわめて重い意味をもつものである。米沢の場合、わが国最初の解剖に立ち会った山脇東洋（一七〇八―六二）の事跡（宝暦四年、一七五四、於京都・六角）に後れること十年、『解體新書』の翻訳刊行の端緒となった杉田玄白（一七三三―一八一七）らの事跡（明和八年、一七七二、於江戸・小塚原）に先んじること七年であった。江戸後期、僻遠の地米沢に西洋医学（当時は蘭方医学）の振興をみたが、いち早く解剖という布石がなされていたと見ることができよう。

解剖の歴史を踏まえて残されている記録に従えば、一番目は前記の山脇東洋、二番目は東洋の門下生すじの栗山孝庵（宝暦八年、一七五八、長州・萩）、三番目は伊良子光顕（宝暦八年、一七五八、京都・伏見）である。なお光顕の祖父道牛は、伊良子家の医家開祖で長崎でカスバル流外科を学び、京都伏見に医を開業した。その祖先は、山形藩主の最上家に仕えたので、道牛は山形の生れであった。四番目は再び栗山孝庵（宝暦九年、一七五九、長州・萩）で、このときが初の女性解剖であったばかりでなく、医師自身の執刀によるはじめての解剖であった。長崎で修業した田中英仙が執刀したといわれる。米沢藩の場合早い順にぎりぎりで十指に入るのではないかと思われる。また東北では最も古い記録であることは間違いないところである。だが、人体解剖は、儒教や仏教思想の影響で、一般とは相容れないもので、記録にもれる事例も少なくなかったであろう。

解剖の記録についてみると、大幅に、かつ急速に西洋医学の知識が取り入れられるようになったのは『解体新書』が流布してからであった。『解体新書』の原本は蘭語版の解剖図譜『ターヘル・アナトミア』で、その底本はドイツ人医家クルムス（J. A. Kulmus 一六八九～一七四五）の解剖学書であることはよく知られている。

米沢藩医の比較的早期の人体解剖との取り組みは、医史的に高く評価されると考える。そして、これを支えたものは、藩士たちの好学の気風と藩医たちの科学的、合理的実験へのつよい志向であったと思われる。

六



北村公園に建つ解體供養碑